

2025 年 2 月 8 日

山極壽一氏講演会 日比谷図書文化館地下コンベンションホール

「ゴリラの目から見た地球の現状と未来」

講師：山極壽一氏

参加者 大人 180 名 中学生 1 名 小学生以下 3 名



山極さんは、40 年以上アフリカに通って、言葉をしゃべらないゴリラや、最近まで文字を持っていなかったピグミーの方達と共に過ごした経験から、今我々が都市を中心に暮している、その生き方そのものがどうもおかしいなと思えてきたそうです。

【大加速の時代】

人口の増加のみならず、他の様々な指標、GDP、水の消費、マクドナルドの店舗数に至るまで、1950 年以降に急激に増加している。今、地球環境が危なくなっている。

人の人口は 83 億に達しようとしている。

家畜の数も全部 10 億を超えていて、地球の陸地の 4 割以上が、人と家畜を食べさせるための畑と牧草地に変わってしまった。

その結果地球の惑星限界を表す 9 つの指標のうち、2023 年には 6 つの指標が限界値を超え、あとの 3 つもそろそろ限界に達しようとしている。

つまり地球は、人間を初めとする様々な生き物が住めない環境になりつつある。

社会も急速に変化した。近代科学、資本主義、新自由主義による世界のグローバル化は個人の利便性や欲望を拡大した。

今までの社会は、科学技術によって富を増やし、集団間のいざこざを、富を分配することによって解消してきたが、既に現在地球の富は限られてきていて、これまでのようなやり方では解決策を講じることができない。

何か違うやり方をしなければならないのではないか。

【二足歩行】

人類は 700 万年前にチンパンジーの祖先から分かれ、二足歩行をするようになり熱帯雨林から草原へと出て行った。

手が使えるようになり、食糧を探して安全な場所で、みんなで食べるようになった。これは相手を信頼する気持ちや、共感力をもたらした（サルは強いものが食べ物を独占する、ゴリラは弱いものにねだられれば与えるが、渋々である）。

草原は猛獣のいる危険な場所で、子どもが襲われることが多かったため、人間は離乳を早め、多産になった。

母親だけでは子どもを育てることが難しく、共同保育が始まり、それによって人々がつながった。つまり、複数の家族を結ぶ共同体ができた。ゴリラは家族しかない、逆にチンパンジーは家族がなく、共

同体的な組織しか持っていない。人間はこの二つを、高い共感力によって組み合わせることができた。また、集団を自由に出入りするという能力も得た。

育児が音楽能力を向上させたという仮説もある。音楽の力は大人にも普及し、一人では乗り越えられないような艱難辛苦を、皆で語りあって、手を握りあって乗り越えていこうという協力、社会力が芽生えた。

【言葉の獲得】

7 万年から 10 万年前にホモサピエンスはアフリカ大陸を出て、北アメリカ、オーストラリア大陸へと進出し始めた。極寒の地や海を越える際には新しい技術が必要で、言葉は大きな役割を果たした。

- ・言葉は重さがないので、どこにでも持ち運びできる。
- ・自分の目で見えないもの、自分で体験できなかったことも、言葉で伝え合うことができる。

しかし言葉では伝えきれないもの、それは「気持ち」。言葉は情報伝達にはすぐれているが、気持ちはなかなか伝わらない。

【農耕牧畜から都市文明へ】

農耕牧畜が 1 万年くらい前に始まり、食料を蓄積できるようになり、人口が増えた。しかし、所有と定住が暮らしの原則となったため、集団間の争いと、国家の形成が始まった。

農耕牧畜が始まって次に都市文明が作られ、多量の労働力が必要になった。特に産業革命後は、生産力を時間で管理し、労働力も時間で管理するという管理社会になった、それが現在まで続いている。

【通信情報革命】

今我々が直面しているのは、通信情報革命。

言葉は 7 万年から 10 万年前、文字は 5000 年前、電話は 150 年前、SNS、インターネットは 40 年前から出てきた、速度がどんどん速まっている。

今は、チャット GPT の時代。その速度に、我々の心や身体はついていけない。危ない状態だ。

脳は、意識と知能が分かちがたく結びついて判断を行ってきた。しかし今、近代科学技術は知能の部分だけを外に出して人工知能によって分析し始めた。でも意識、感情の部分は外に出せないため、知の部分だけが一人歩きし始めている。情緒的社会性が失われつつあるのではないか。

「A I が人間を乗っ取る時代」というものが、予測では 2045 年だが、もうすぐやってくるのではないか。それは、A I が進化する速度よりも、人間が劣化する速度のほうが早いから。人間はもう劣化している、脳も縮んでおり、だんだんロボットみたいになってきている。危険な状態。

【新たな暮らしの構築】

命と命のつながりをはっきりと見据えて、新たな暮らしを築かなくてはならない。

我々は既にフィクションの世界に半身突っ込んで暮らし始めているが、現実の世界の変化に瞬時に対応する体験をもっと重視する必要がある。

視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚の五感のうち我々は霊長類の仲間で、視覚を第一にしている（実際に見ることで、納得する）。視覚・聴覚は共有しやすい感覚。

臭覚・味覚・触覚は共有しにくい感覚だが、それを共有したいという気持ちが共感を生む。我々はそれを使って信頼を形作ってきた。

今、五感のうち視覚、聴覚を優先させる風潮が高まってきていて、共感を感じにくくなっている。

歌う能力も大切。直立二足歩行を始めたことにより、踊れる体ができ、歌う声が備わった。つまり共に歌い、踊ったことだろう。それが共感力を高める役割をしたと思う。

【西洋の知と東洋の知】

西洋の知は「二元論」「拝中論」・・・○か×のどちらか

東洋の知は「容中論」・・・「間」、「と」、「見立て」

日本人が大切にしてきた里山、里海は、山にも里にも属さない、または海にも里にも属さない。それを容認するのが容中論。

近代科学を作った西洋の知を活かしながら東洋の知（容中律）を融合させて社会を作り直していくことが、今求められている。

西洋の知：世界を要素にわけて、その要素の力を拡大し、組み合わせて新しい世界を作ること。

それは今、地球を破壊することになっている。

東洋の知：全体を全体として見て、自然の力をそのまま使って、その力を活かそうとする。

文化と科学が共鳴し合う新たな環境倫理を作ることが必要。

【人と人が信頼するネットワークを】

SDG s の 169 のターゲットに欠けているもの、それは、「文化」。

文化は小さい単位でできるもので、広がってはいかないはずのものだが、今、文化の均一化、無国籍化が進んでいる。

人と人とが信用し、信頼関係で結ばれる時代から、人が、制度やシステム（キャッシュカードやクレジットカードなど）を信頼する時代になって来つつある。

我々は今新たに、関係性を重視した文化の再構築をしていかななくてはならない。人間の社会は移動する、集まる、対話するという3つの自由でできているが、それが今回の新型コロナウイルスによって奪われてしまった。この3つの自由をどう組み合わせて社会を作っていけば良いのか考えなくてはならない時が来ている。

実際の山極壽一氏のお話は、熱意と迫力が聞き手にビンビンと伝わってくるもので、文字では到底表せません。「気持ち」の部分が言葉には抜けているというお話しでしたが、文章で表せるものは限られています。実際に話し手の表情を見て、声を聞いて納得することの大切さを感じさせていただきました。



講演会の後、休憩を挟んで上遠恵子さんとの対談もありました。上遠さんから、父上のあだ名が「ゴリラ」だったというエピソードも披露され、終始和やかな雰囲気の中で話が弾みました。

本講演会には、電磁波を浴びると体調を崩す方も参加されました。そのため、会場の皆さまにはホール内ではスマホを切る（マナーモー

ドではなく) ことをお願いしました。

電磁波の測定値は

- ① 最寄り駅前： $2.5\mu\text{W}/\text{cm}^2$ 。
- ② 日比谷図書館一階： $0.7\mu\text{W}/\text{cm}^2$
- ③ 会場内： $0.0002\mu\text{W}/\text{cm}^2$

だったそうで、体調を崩すことなく安心して講演会に参加していただくことができました。(欧州評議会の規制値は $0.1\mu\text{W}/\text{cm}^2$ 、将来的には $0.01\mu\text{W}/\text{cm}^2$)

会場の皆さまのご協力、誠にありがとうございました。

(小川 記)